
死獄薔薇人形 DEATH DOLL

銀まり亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死獄薔薇人形 DEATH DOLL

【Nコード】

N6477B

【作者名】

銀まり亜

【あらすじ】

一人の少年とヒトじゃない生き物たちの生と死のやさしく哀しい物語。

カウントダウン1 ドール少女

この物語は、一人の少年をとりまく、死についてのお話。

カウントダウン1 ドール少女

ここは教室。

黒板には『自

習』の文字。

教師達は、なにやら臨時の会議でみんないない。

生徒達はある話題で盛り上がっていた。

あー』

『ねえ〜聞いたあ？転校生来んだってさ

』知ってる知ってるツ！何か、外国から

来た』らしいよ〜』

『へえーそうなんだあ、でっ女？可愛い

の？この学年？』

『あーいつぺんに聞くな！…それがよく

わかんないんだ、その『見字』にもきてないみたいで…』

『まじでえ？』

とまあ、生徒の声が聞こえてくる。

「ここ、聖桜高校は最近できた高校で、女子の制服が可愛くて、男子のは格好いいと言う理由で人気がある高校でもある。しかも偏差値が低いし、誰でも入れる。」

「そんな理由ではないが、俺ロクジョウ六条青は先月入学した。理由は家から近いと言うだけ。」

「さっき、女子達と言ってた転校生ってどんなヤツだろ？」

なぜだか、いつもはそーゆーことはあまり、てか全然気にしない俺
だがかかなり気になった。

バサツ バサツ

カーテンが音を立てる。

今日はやたらと風が強い。

俺の席は窓側の端の列の一番後ろの席の隣。

ふと、外を見た。

銀色の糸

?.....いや、髪の毛だ。

階…だよなア)

(なんで人形があんなトコに ?ここ3

その人形は大きな純白のカマに座り銀色の長い髪を地面にむかって垂らし、そして哀しいような深い碧色の目をしている。

俺には人形にしか見えなかった。

その目は俺を見ている気がした

ガラッ

俺が驚いていたところに担任の珠洲^{スエタラ}邑^{レイナ}伶奈が教室に入ってきた。
珠洲邑伶奈は教師にしては可愛いと言うか、童顔な先生だ。
担当教科は音楽。

ハッと思い、さっき人形がいた窓を見ると、

そのドールは
居なかった。

「え〜と、みなさんおはようございます。」

もちろんその
挨拶は生徒達に聞こえるはずもなく、かえって来るのは、質問だけ。

『センサー、転校生ってどうなったんで

すかア？」

けた。

さっき話していた女子生徒が質問をぶつ

「はい、そのことですが、先生たちで話し合った結果、転校生の子はうちのクラスに入ってもらうことになりました！…というか、そのこの希望で。」

『…まじでえー！』

『よっしやーあ』

『やったねえ』

ザワザワと盛り上がっていく教室内。

「えっと、で

はどっしぞー…！」

んだ。

教師がドアにむかって少し大きな声で叫ぶと

ガラッ

「
…」

ドアが開き俺は興味深く入ってきた子を見る。

「……………!!!!」

俺はびっくりして声にならない感情を表現した。

そう、今教室に入ってきた子は、ついに
つき見たあの人形にそっくりだったのだ。

再び窓をみた。

だが、その人形はいない。

俺が驚いている
るのをそっちのけで先生はどんどん話しを進めていく。

いや…俺だけじゃなく皆が驚いている。

その女の子をみて。

そのこはさっ
き見たとおり銀色の長い透き通った髪の毛を垂らし、頭上には黒
いリボンのついたカチューシャをしていて、そして何よりも、大き
い瞳。 淡い碧色。

真っ白と言っても過言ではない白い肌。

ちょっとおかしいといえば身長。

高校生にしては小さすぎる。

たぶん144センチぐらいだろう…

それ以外は度を越えている美人可愛い、

どう表現していいのかわからないんだっ

！

とにかく、ク

ラスの女子が可愛いとか言ってるモデルの人とか比べものにならないくらい美人。

クラスの女子がゴミに見えるくらい…

のか、先生は話す。

皆が唾然としているのを気付いていない

「え、この方は、フランス？からこっちに来ました。えっと…あつ！名前は翡翠^{ヒスイ}桜^{サクラ}さんです。」

(ひすい…？そんな名字聞いたことない。

…しかも、さっきから、俺のこと見てない？

…目が合ってますけど…)

やはりそんなことお構いなしに先生は話
す。

「…はい以上です！翡翠さん何か一言

あるっ？」

その質問に翡翠の視線は俺から外れ、先生のほうにギロリと移った。
そして一言。

「…ない」

翡翠の発した声が教室に響き渡る。

その声は低く艶があった。

「ええ…？あ　そうですか」

ちよつと動揺している先生。

「えつと…」

「じゃあ席は…」

と言いつけたとき…

「あいつの隣の席」

(あいつ…？だれだろ)

そう思い翡翠が指をさし

ているところを見つみると…

(俺の隣かよっ！…！…！)

皆の視線が痛い。

を鳴らしながらこっちにくる
からねッ！

そして、コツコツとブーツのソコ
…ってここ学校！…ブーツだめだ

らに近づいてくる。

と突っ込みながらも翡翠はこち

ン。

スト

が椅子に座る。

翡翠

らさせたりしている。

窓の外を眺めたり、足をぶらぶ

窓を眺めている姿

は、絵になるような……すばらしい姿だ。

る。

風に銀色の透き通った髪が揺れ

「じろじろ見るな」

突然目の前にいた人形が口を動

かし一言。

いや、

人形ではなく翡翠桜が一言。

俺は知らぬま

に見つめていたみたいだ。

14

「あ…じめん」

謝

ったあと、

「ふん」

っ

んとまた翡翠はそっぽを向いてしまった。

た、謝ったって!!!(

(なんだそれえええ!!!今、俺謝っ

った。

またもや突っ込みを入れてしま

たっけかなア。

…俺、こーゆるキャラだっ

す、

「えと、では授業はじめま

ふと先生の声が耳に入った。

「えー今日は数学の先生が体調を崩したそうなのでこの、
大学入試レベルのプリントやっけていてください。」

『えー』

『無理!』

『わかんねえ』

みんなのブーイングが広がる。

そのなか翡翠は一人、外を眺めていた。

(「これ、NASAレベルってヤツ?」)

そのプリントには、

1, 2, 3, …, 2000は、1, n, 2, n, …, n, 2000
2, 3, …, 2000)

を満たす整数です。

$S_n = (1 + n) + (2 + n) + (3 + n) + \dots + 2000$
n, (nは自然数) を考えます。
S

1 // 19, S2 // 99のとき、S3の最大値を求めなさい。

という問題。

(無茶だアアアアアアアアアアアア!!)

! ! ! ! !

って、皆真剣にやってるー!!)

「はあ…」

思わずため息が出る。

「はい、じゃあ回収

します。」

(えっもうそんな時間…?)

気付いたら30分がすぎていた。

結局、俺はあの問題を解くことはできなかった。

「あれっ…翡翠さん、回答出してください。」

「い。」

る。

みんなの視線が翡翠に集ま

ている視線を外し、先生に向ける。

翡翠は、窓の外を眺め

そして一言。

「こんな幼稚な遊びをやる

ために此処に来たわけではない」

(「EEEEEEEE!!!」?)

「え…? ってことは翡翠さ

ん解けるんですか?」

「当然だ。」

(「まじでかアアアア!」?)

「答えは?」

「答えは…、S3=133だ。」

「せ、正解です」

(まじでエエエエエ！?)

皆、クラス全員の顔が啞然としている。

あの問題を解いた。

わずか数秒で。

人間とは思えない頭脳だ。

(そういえば、なぜこんな

時期に日本に来たのだろうか?)

今は試験が迫っている時期

だ。

(わざわざ、こんな時に来なくても…来て
ても、もう少し遅くに転向すればいいのに…
…しかも、フランスに居たって言っ
てたよな?日本語うますぎじゃね?)

なんか翡翠には疑問しか浮かばない。

そして不思議な彼女と初めて出会った日がおわった。

カウントダウン1 ドール少女 (後書き)

これからも頑張ります。どうぞ宜しく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6477b/>

死獄薔薇人形 DEATH DOLL

2010年10月15日08時25分発行